

3, 4, 5歳児における体育活動に着目した保育について — 保育意識に関する量的分析 —

小沢 日美子

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2013年11月1日受付、2013年12月19日受理)

要 旨

ここでは、幼児期の心身の発達・成長の影響要因を検討するために、幼稚園・保育園で行われている体育専門の研修・学習等の経験を持って指導する保育者による「体育活動」、及び体育が専門の講師等の指導による「体育活動」に着目して、実施園における保育意識に関する量的分析を行った。初めに、「体育活動」の指導者が参加した活動の実施状況を尋ね、そして、「体育活動」を通した3, 4, 5歳児における社会性の発達への影響を107園に尋ねた(回収率65%、69園)。その後、上述の内容に該当する「体育活動」を導入しているとした58園から得た回答を検討した。因子分析を行ったところ、3, 4, 5歳児における社会性の発達への影響要因は3因子構造であると考えられた(第1因子は「自己意識」、第2因子は「役割取得」、第3因子は「自己発揮」)。今回の調査内容から、幼児期の保育活動の中で、専門的な視点を導入した「体育活動」を実施することは、自己意識の多面的な発達の促進に関連することが考察された。

I. 問題

子どもを取り巻く状況における複雑な社会構造とそこでの価値観の変化から、質的な対人関係の変化、社会・教育への参加の姿勢の変化が語られるようになって久しい。そのため子どもに関わる保育・教育現場は、これらに起因する諸問題に対応することを要請されている。元々、子どもの教育の本質には、教職関連科目の学びからの人間理解の深さや、人間の発達を自らの問題ととらえる哲学的思考態度と、現実の関係形成にかかわる倫理性、そして価値観の客観的把握などが求められるとされる。そこでの教育的関係とは、より成長した人間同士の関係にも成立するものであり、教育の現場とは、子どもとそこに関わる大人とにおける体験の場と捉えられるという。松村(1979)は、人間発達の過程における他者や環境との関係を捉えて、つぎのように述べている。「子どもの発達の理解とは、理解しようとする人たちが子どもたちと共にいてそれぞれにちがう役割をとりながら活動を共にすること(接在共存活動)の発展をもたらす行為となるように進められる。それは、接在共存活動の発展を志向し、活動の過程でこれまでの活動成果を共有し、さらに発展を志向して展開される一連の運動である。(中略)。重要なのは、子どもたちと共にする接在共存活動の理解、その理論的基礎

である。『いま・ここで・新しく』接在共存活動の発展をもたらす技法および実践である」。つまり教育・保育の実践では、それぞれの体験の場における自我形成を客観的事実に即した理解とともに進めながら、具体的な目標や仮説を意識して考えを深め、そこでの子どもについての学びのねらいを定めて、自発性や創造性を生かした活動の展開を促進することが課題になる。そこでは、人間理解としての児童観、教育観のあり方が重要である (eg, 小沢 (2012))。

これらの諸課題に取り組むために、本研究では、保育を保育者の側がどのように捉え、どのような発達を望むかについて、実際に現場で既に実施されている他職種の専門性を生かした「体育活動」に着目したいと考えた。なぜなら、今日、子どもの社会性の発達の成熟という大きな課題と取り組むためには、人生早期の幼児期における他者との関係発達の中で、自己意識がどのように育まれるかの影響を考えることが欠かせない。その背景には、子どもの認知的な発達における教育作用の影響、また教育者や保護者のかかわり方とその連携など、今後の教育実践の指針や方法論を導き出して行くための多種多様な課題があるからである。そこで、幼児期の子どもが通う幼稚園・保育所等の保育で、学級担任等の保育者だけでなく、ここでは専門的な体育活動に関する研修の機会等を有した保育者、あるいは、体育等の指導を専門とする講師等 (教師・有資格者・院生/学生等) が参加して行われる「体育活動」に着目することとした。従来からも、幼稚園・保育所では、『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』に示されるように、幼児の遊び・生活といった総合的な活動を通し、健康、人間関係、表現、環境、言葉の5領域の発達を促すことが行われてきている。その中で、ここでは、とくに健康と関連が強いと考えられる「体育活動」について検討を進めたい。幼児期の運動発達は、自らの取り組みであると共に、基本運動の充実の両者が求められている。小沢 (2013) で述べたように、保育活動における「体育活動」が充実して行われる導入段階においては、学級担任等の保育者と「体育活動」を担当する保育者・体育講師の関係調整が重要である。そして、体育の専門的観点による運動の基本構造を理解した指導は、子どもたち自身が体を動かすことに関心を高め、より自発的に取り組むことに繋がると考えられた。杉村 (2008) は、「子どもの体力づくりは自ら運動的遊びにとりくみ、運動的遊びのおもしろさを体験し、運動遊びを発展していく中で結果的になされるもの」という近藤 (1984) の言を取り上げながら、「幼児期では生涯の運動の基本を獲得する時期であり、出来るだけ多くの基本的運動パターンやバリエーションを身につけることが課題である」と述べている。また、佐藤ら (2013) は、「特に幼児の運動能力や生活習慣に対する運動実践の効果の調べでは、指導者の運動に関する意識や子どもとの関わり方などにより、子どもの運動能力が高まる結果が示されている」と述べて、指導者の運動に関する意識と子どもとの関わり方の重要性を示唆した。また、荒井 (2009) は、乳幼児の運動指導の条件として、「子どもの『こころの発達』を十分に理解し、さらに一人ひとりの『こころとからだの発達の状況』と『運動感 (キネステーズ) を把握したうえで、個に応じた対応が前提条件となる』」と述べている。本研究では、幼児期の子

どもの運動の基本指導が、体育の専門的視点を重視した活動を積極的に取り入れることで向上し、さらに社会性の発達にも促進的な影響を与えているかどうか考えていきたい。そこで、ここでは体育・スポーツを専門とした研修または実践の経験を通し学ぶ機会をもった保育者、あるいは、体育・スポーツを専門とする者（教師・有資格者・院生/学生等、以下、本報告では体育講師と呼ぶこととする）による「体育活動」に着目していく。そして、幼児期における社会性の発達を、大人を対象としたスポーツ活動参加とライフスキルの関連を述べた研究（西田,2004）の観点を応用して検討することとした。なお、「ライフスキル」とスポーツの研究では、スポーツ場面での個々の心理社会的スキルがどのようなライフスキルと結びついているか、また、スポーツ活動を介してどのようなライフスキルが獲得されているのか、この2つの視点（杉山,2004）が提供されているが、ここでは後者の観点から検討を進めたい。なお、ライフスキル獲得のプロセスの事前研究（cf., 大嶽・加藤・小坪,2011）もあるが、ここでは導入後の心理社会的スキルの伸長との関連による検討を進める。

表1「ライフスキル」の構成・分類

表1-1 ライフスキルの構成要素10項目（WHO,1997）

No.	ライフスキルの構成要素10項目(5つの領域別)
1	「意志決定」と「問題解決」
2	「創造的思考」と「批判的思考」
3	「効果的コミュニケーション」と「対人関係スキル」
4	「自己意識」と「共感性」
5	「情緒への対処」と「ストレスへの対処」

表1-2 ライフスキルの2つの分類（上野・中込,1998）

No.	分類	分類の観点
1	個人的スキル	個人の自主的な取り組みにより獲得可能
2	社会的スキル・対人的スキル	社会における他者とのかかわりを通して獲得が可能

II. 目的

幼稚園・保育所等で、保育者、または、体育講師等によって体育の専門的視点を重視して行われている「体育活動」を通じた幼児の社会性の発達の变化を心と身体の両者について検討する。そして、「体育活動」における指導者（保育者及び体育の専門的指導者）に期待されるかかわり方への考察を加える。

III. 方法

1. 調査対象（幼稚園・保育所等）：Internet上のsearch engineによってKeyword（「幼稚園」「保育園」「特別活動」「特別教室」）検索に上がった順（所在地域その他の条件にかかわらず）に107園に対して郵送等で調査用紙を送り調査協力を依頼した（2012年12月～

2013年2月)。回答が返却された69園(回収率65%)のうちの84%にあたる58園において「体育活動」に着目した保育を行っているという回答を得た。そこで、この58園(幼稚園37、保育園13、認定こども園2、幼稚園及び保育園1、未記入5)を調査の分析対象とした。

2. 手続き：質問紙法。質問内容は以下である。「質問1」：体育等の「特定分野の活動(外部講師等を活用した特定の専門性を重視した活動)」の実施状況(活動種類、参加形態、実施対象児、実施頻度等)への質問、「質問2」：「特定分野の活動」のうち、「体育」の実施による3, 4, 5歳児への他者理解の発達に関連する影響を尋ねる10項目〔(大嶽・加藤・小塚(2011)のライフスキル尺度の項目を参考として一部改訂した。(例)：「友達と力を合せて取り組むことができる」、「友達の良いところは見習うようにしている」、など〕、「質問3」その他(自由記述)。質問1、問2、問3の質問による調査を2012年12月～2013年2月に実施した(予備調査を含む)。そして、69園の回答から、ここでは、問2を中心に、これまでに述べて来た方法による「体育活動」と幼児の社会性の発達についての保育者意識に関する量的分析の結果を報告し、考察を加える。

※ なお、質問3は、小沢(2013)にて報告しているため、ここでは質問2の内容を中心に述べる。

IV. 結果

1. 質問1：「特定分野の活動」、及び「体育活動」の内容等について

初めに、ここで取り上げる「体育活動」の他にも、特定の分野の研修を受けた保育者、あるいは、それぞれの活動における専門家や専門の講師が、当該活動の役割を担って行う「特定分野の活動」が実施されているかどうか、もしされていれば、それは何かについて尋ねた。

58園より回答されたその活動内容は全部で42種類と多岐に渡っていた。その中で、回答された園の25%以上で実施されていた活動を領域ごとに分類すると「体育」「音楽」「水泳」「英語」「絵画」「茶道」の6種類であった。それ以外の「学習」「表現・ダンス」「器楽」「スポーツ」「その他」の項目は、同傾向の活動を合わせて類別して名付けたものである(表3参照)。なお、上位の6種類の領域の活動では、学級単位の参加形態が多かった。それぞれの回答が占める比率の順は、「体育」(78%)、「英語」(71%)、「音楽」(45%)、「水泳」(32%)、「絵画等」と「茶道」(25%)である。

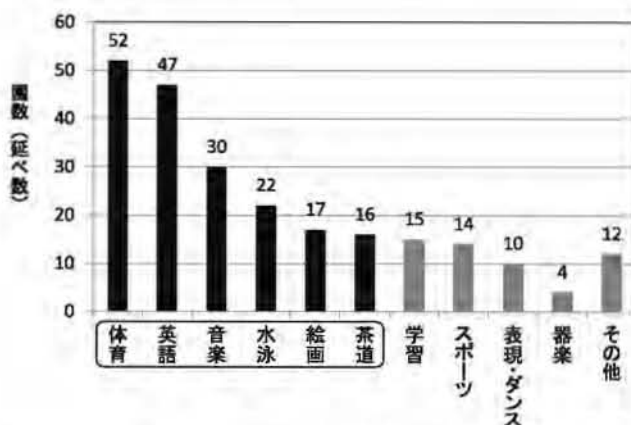


図1 「特定分野」の講師等とともに調査協力69園で現在行われている活動領域・種類の実施状況

表2 「特定分野」の領域・種類の「補足」

図1の学習、表現・ダンス、器楽・スポーツ・その他は、幾つかの異なる名称の活動をつぎのようにグループ化している。

- ・「学 習」：硬筆、習字、知育、幼児教育、文字・数、パソコン、科学、その他英語。
- ・「表現・ダンス」：バレエ、日本舞踏、リトミック、モダンダンス、キッズダンス、ヨガ。
- ・「器 楽」：バイオリン、ピアノ、和太鼓。
- ・「ス ポ ー ツ」：体操、テニス、サッカー、ラグビー、剣道、空手、柔道、ムーブメント教育、スポーツチャンバラ、スポーツ教室。
- ・「そ の 他」：雪山あそび、陶芸、造形、モンテソーリ、ピグマリオン、ストーリーテリング、園芸保育、かおかた、表現。

2. 結果の1で、「体育」領域の活動を行っていると答えた園の質問回答者について尋ねたところ、質問紙の記入者件数は、表3のようだった。

表3 質問紙の回答記入者

理事長	園長	副園長	教頭	主任	担任	未記入	計
1	24	9	1	14	3	6	58
1.7%	41.4%	24.1%	1.7%	24.1%	5.2%	10.3%	100%

管理職等の教職員の指導的立場にあり、各園の保育・教育活動の方針・目標を定める立場にあると考えられる園長を中心とした役職者による回答の記入が多かった。なお、表の「未記入」とは、空欄による無回答を示すが、複数の者で書かれた可能性なども考えられる。

3. 質問2：「体育活動」の参加による年齢児ごとの行動全般への影響について

質問項目1～10（表4）参照）によって、年齢児ごとの行動全般への影響を尋ねた。

(1) 10の質問項目ごとに、「体育」領域の活動の影響の程度を尋ねた。4つの選択肢（そう思う：4、ややそう思う：3、余りそう思わない：2、そう思わない：1）からの頻度についての回答より年齢による相違は、 χ^2 検定の結果、7つの質問で有意だった（すべて $p < 0.01$ ）。また、「2. 友達と力を合わせて取り組むことができる」と、「4. グループでの自分の役割を見つけている」は、下位検定のすべてで年齢間による相違が有意だった（ $p < 0.01$, または $p < 0.05$ ）。

表4 「体育」活動を通してのライフスキル獲得における発達差

No	質問項目	3歳,4歳,5歳	3歳,4歳	3歳,5歳	4歳,5歳
1	集団における決まりごとを守る	$p < 0.01^{**}$	$p < 0.05^*$	$p < 0.01^{**}$	-
2	友達と力を合わせて取り組むことができる	$p < 0.01^{**}$	$p < 0.05^*$	$p < 0.01^{**}$	$p < 0.05^*$
3	友達の良いところは見習うようにしている	$p < 0.01^{**}$	$p < 0.10^{\dagger}$	$p < 0.01^{**}$	$p < 0.01^{**}$
4	グループでの自分の役割を見つけている	$p < 0.01^{**}$	$p < 0.01^{**}$	$p < 0.01^{**}$	$p < 0.05^*$
5	他の人より運動やスポーツがうまくできる	-	-	-	-
6	クラスのいろいろな友達と話をする	-	-	-	-
7	何かをやり始めるとそのことに集中する	$p < 0.01^{**}$	-	$p < 0.01^{**}$	-
8	グループのリーダーとなり、みんなを引っ張っていける	$p < 0.01^{**}$	$p < 0.01^{**}$	$p < 0.01^{**}$	-
9	緊張場面でもリラックスできる	-	-	-	-
10	何事にも自分の能力に応じて挑戦する	$p < 0.01^{**}$	-	$p < 0.01^{**}$	-

※ 3, 4, 5歳児における発達差が有意だった項目1～4, 7, 8, 10の下位検定結果を記載している。

※ 行内に、-(ハイフン)を記載した項目の欄では、有意、及び有意傾向が見られなかった。

(2) 幼児（3, 4, 5歳児）への「体育」領域の活動におけるライフスキル項目に関する質問紙への回答による社会性の発達に関する保育意識について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、52の各園の工夫のもとに行われている「体育」の専門性の観点を導入した「体育」領域の活動、これを通しての幼児期における社会性の発達への影響要因は、3因子構造だった（表3参照）。因子分析結果からの第1因子を「自他意識」（項目2：「友達と力を合わせて取り組むことができる」、項目1：「集団における決まりごとを守る」、項目10：「何事にも自分の能力に応じて挑戦する」と命名した。第2因子を「役割取得」（項目8：「グループのリーダーとなり、みんなを引っ張っていける」、項目4：「グループでの自分の役割を見つけている」、項目7：「何かをやり始めるとそのことに集中する」、項目3：「友達の良いところは見習うようにしている」、項目6：「クラスのいろいろな友達と話をする」と命名した。第3因子を「自己発揮」（項目5：「他の人より運動やスポーツがうまくできる」、項目9：「緊張場面でもリラックスできる」と命名した。また、幼児（3, 4, 5歳児）の発達の变化に関わる箇所では、 χ^2 検定の結果が有意だった7項目は、第1因子の3つの項目すべてと、第2因子の5つの項目のうちの4つの項目であった。したがって、ここで取り上げている「体育」領域の活動を通しての幼児期の社会性の発達に関する影響を与えていると考えられるものとして、発達的に変化する性質の要因と、その他として子ども個々の性質

に依存傾向のある要因があげられる。

表5 「体育」活動を通じたライフスキル獲得に関する質問項目の回答による因子分析の結果 (N=58)

質問項目	因子			h^2
	I	II	III	
項目2 友達と力を合わせて取り組むことができる	0.85	-0.03	0.14	0.75
項目1 集団における決まりごとを守る	0.78	-0.08	0.01	0.61
項目10 何事にも自分の能力に応じて挑戦する	0.68	0.06	-0.03	0.47
項目8 グループのリーダーとなり、みんなを引っ張っていく	-0.04	0.84	-0.02	0.71
項目4 グループでの自分の役割を見つけている	-0.11	0.67	0.25	0.52
項目7 何かをやり始めるとそのことに集中する	0.20	0.63	-0.08	0.45
項目3 友達の良いところは見習うようにしている	0.47	0.50	-0.12	0.49
項目6 クラスのいろいろな友達と話をする	-0.11	0.40	0.36	0.30
項目5 他の人より運動やスポーツがうまくできる	0.24	-0.13	0.80	0.72
項目9 緊張場面でもリラックスできる	-0.13	0.13	0.74	0.58
因子寄与	2.16	2.01	1.43	3.31
寄与率	34.85	16.71	6.99	58.55
	I	II	III	
	1	0.34	0.10	
		1	0.49	
			1	

V. 考察

本調査では、幼児期の子どもの保育現場で、保育者の行う保育活動の中に位置づけた「特定分野の活動」における有資格者等と共にする活動が定例的に導入されている69園からの回答を得ている（回収率65%）。今回の報告では、「体育活動」を実施しているそのうちの58の園の回答について整理して、量的な分析を中心に報告した。園からの各回答記入者による幼児3, 4, 5歳児における体育活動の導入・実施に関する回答の内容からは、各園の状況に応じて工夫して取り組まれていることと、その工夫や状況づくりの中での「体育活動」と幼児期の社会性の発達との関連が考察された。とくに、「体育」活動導入のきっかけについては、運動能力と幼児の発達との関連が多く挙げられていた（小沢、2013）。そこで、幼児期における「体育」の専門性を重視した保育活動（「体育活動」）を通して社会性の発達に影響したかどうかを尋ねて、園から得た回答について因子分析を行った結果、3つの因子構造が示された。第1因子を「自他意識」、第2因子を「役割取得」、第3因子を「自己発揮」と命名した。これらはすべて自我の発達の促進に関連深いと考えられる。したがって、幼児期の幼稚園、保育所における「体育活動」の導入は、幼児の狭義の運動能力との関連に限らず、幼児の個々の自我の発達、そして、その生活の場である集団における成員としての役割取得能力の発達、そして参加する集団と自己との関係、これらの事がらが重層的に関連していることが示唆された。たとえば、第3因子の項目では、 χ^2 検定による年齢児ごとの頻度の差が有意でない項目がみられた。つまり、第3因子の項目は、その指導の場における指導目標、指導法との関連において変化しうるものであると考えられる。もちろん幼児期における集団指導では、第3因子の項目が示すような「他の人よりも上手になること」、「意識的にリラッ

クスすること」は、幼児の保育活動における自発性や創造性の尊重とはしばしば拮抗する関係にもあるだろう。そのため、必ずしも各園の教育のねらいとしてかかげられているものではないかもしれない。ただ、しかし、小沢（2013）で述べた自由記述回答においても考察されたように、園における「体育活動」とは、単に身体能力の向上という理由だけでなく、幼児期の子どもを受け入れる園がそれぞれに多彩な保育機能の充実を幅広く進めているなかで、子どもたちにおいてその育成が重要だと考えられる社会性の発達が重視されているものと考えられる。

最後に、今回の調査では、保育者・体育講師等における子どもの内面に根づく深いような気づきへの指導・支援、子どもの成長・発達の流れへの理解の深化、また、具体化された客観的事実に即した理解について直接尋ねてはいない。しかし、それぞれの園の活動において具体的な目標や仮説を意識しながら考えを深めることで、何を子どもにおいての学びのねらいとし、自発性・創造性を生かした豊かな活動を展開し促進しうるのかについて意識するプロセスの中で、ここでの結果が顕在化されたものと考えることができる。ただし、子どもの認知的発達とそれを促す教育経験、とくに対人関係の側面の展開について、そして、子どもの自己や他者との関係を育成する教育者や保護者のかかわり方や連携、これらへの具体的な影響について、今回の調査で言及することはできない。ここでは、園ごとに、従来より、独自に実施されてきているその分野の専門性を特に重視している「体育活動」に着目し、その活動との関連において進められてきている社会性の発達に関する保育意識を報告した。そして、「体育」という一つの専門性を重視した保育活動の展開が、「自己理解」「役割取得」「自己発揮」という自我の育ち、自己抑制能力、集団の中で生きる力それぞれの発達と関連していることが示唆された。そこからは、幼児受け入れ機関であるそれぞれの園が、仮に母性的な機能に限定されない幅広く多彩な機能の充実を進めて来ていることが考察される。今後は、「体育活動」を介したライフスキルの発達と日常生活との関連、また、調査対象、及び内容を拡張することが課題と考えられる。

謝辞：本調査に、お忙しいなか快くご協力頂きました園の先生方に、心より深くお礼申し上げます。また、幼児教育全般に渡る見識を通して、人間の心身の発達を捉えるための深い洞察を与えて頂きました九州女子短期大学大庭茂美教授にお礼申し上げます。

付記：本研究は、九州女子大学・九州女子短期大学平成24年度特別研究費（萌芽的研究プログラム）受託により行った「幼児期の他者理解の発達 - 『特定分野における諸活動』との関連に着目して - 」の研究の一部にあたる。

引用・参考文献

- (1) 荒井迪夫「乳幼児の運動発生に関する一考察」『淑徳短期大学研究紀要 (48)』2009 (H.21) 年, pp.93-105.
- (2) 荒井迪夫・中西一弘「幼児体育指導者の動感認識に関する一考察」『淑徳短期大学研究紀要 (52)』2013 (H.25) 年, pp. 61-70.
- (3) 木村達志・石山由美・松永有三「保育者養成校(短期大学)と付属幼稚園との連携による幼児教育現場での幼児体育Ⅰの実施」『安田女子大学紀要 (41)』2013 (H.25) 年, pp.169-175.
- (4) 松村康平「第3章 発達と接在共存－関係学の立場から－」, 五味重春・田口恒夫・松村康平(監)『幼児の集団指導－新しい療育の実践－, 幼児集団指導研究会編』1979 (S.54) 年, 社会福祉法人日本肢体不自由児協会.
- (5) 多田立美・杉原 隆「幼児・児童の運動能力の発達と体育教室での行動との関係」, 『日本体育学会大会号(51)』2000 (H.12) 年, p.168.
- (6) 田中真紀・稲垣実果・石川隆行「幼児の運動能力と向社会性との関係について」『聖母女学院短期大学研究紀要 (40)』2011 (H.23) 年, pp.58-62.
- (7) 中澤 潤・泉井みずき・本田陽子「幼児の有能感の認知と遂行との関連－幼児楽観性の視点から」『千葉大学教育学部研究紀要 (57)』2009 (H.21) 年, pp.137-143.
- (8) 中山忠彦・中井 聖「幼児の発育発達特性や社会性の獲得に配慮したサッカー教室が幼児の心理状況や体力に及ぼす効果」『近畿医療福祉大学紀要 (13-1)』2012 (H.24) 年, pp.23-29.
- (9) 小沢日美子「3, 4, 5歳児における体育活動に着目した保育－自由記述式の回答より－」『九州女子大学・九州女子短期大学紀要 (50-1)』2013 (H.25) 年, pp.179-189.
- (10) 小沢日美子「幼児の「心の理論」の獲得における発達的特徴とコミュニケーションの変化－AとBの事例－」『九州女子大学・九州女子短期大学紀要 (48-2)』2012 (H.24) 年, pp.189-203.
- (11) 七木田敦・杉村伸一郎・財満由美子・林よし恵・三宅瑞穂・菅田直江・正田るり子・落合さゆり・田中沙織・佐藤智恵・松井剛太「幼児の運動能力の発達と保育環境との関連に関する研究」『広島大学 学部・附属学校共同研究紀要』2008 (H.20) 年, pp317-323.
- (12) 佐藤喜代・戸田芳雄・秋山エリカ「「こどもスポーツ」を扱う教育的意義－幼児教育の視点から－」『東京女子大学・東京女子短期大学紀要 (48)』2013 (H.25) 年, pp.50-70.
- (13) 杉村伸一郎・浅川淳司・岡花祈一郎「幼児期の社会性の発達における運動の役割」『日本教育心理学会総会発表論文集(52)』2010 (H.22) 年, pp.301.

-
- (14) 杉村伸一郎・浅川淳司・岡花祈一郎・財満由美子・松本信吾・林よし恵・上松由美子・落合さゆり「幼児期の発達における運動の役割」『広島大学 学部・附属学校共同研究紀要(38)』2009 (H.21) 年, pp.295-300.
- (15) WHO (編) : 川畑徹朗・西岡伸紀・高石昌弘・石川哲也 (監訳) 「WHO・ライフスキル教育プログラム」1997 (H.9) 年, 大修館書店: 東京.
- (16) 吉川晴美・義永睦子「幼児の人間関係の発達に関する事例的研究: 人間関係とことばの発達」『東京家政学院大学紀要 (35)』1995 (H.7) 年, pp.27-34.

Childcare activities with three, four, and five-year-olds assessed by focusing on gymnastics

Himiko OZAWA

Kyushu Women's Junior College Department of Childhood Care and Education
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, Fukuoka, 807-8586, Japan

Abstract

Here, the gymnastic activity in a kindergarten and a nursery school considered the gymnastic activity by instruction of the childcare person who had training of gymnastics, or the lecturer of gymnastics. Investigation about the influence which it has on development and growth of the mind and body of the infancy of the activity was conducted to 107 the places of childcare. First, the implementation situation of activity by the lecturer of the exterior including a gymnastic activity was asked. And the influence of the development on the sociality of the small child by a gymnastic activity was asked. The reply was obtained from 69 the places of childcare. As a result of conducting factor analysis, they were 3 factor structures (1st factor: "oneself-and-others consciousness", 2nd factor: "role taking", the 3rd factor : "self-exertion").